

書 評

若林俊輔著, 小菅和也ほか編『英語は「教わったように教えるな」』(研究社)

Book Review: WAKABAYASHI Shunsuke, "Never Teach English The Way You Were Taught." edited by KOSUGE Kazuya et al.

淡路 佳昌

Yoshimasa AWAJI

Key words : 英語授業学, 若林俊輔, 教科教育法

本書は、東京学芸大学や東京外国語大学から数多くの英語教師を世に送り出し、英語教育の様々な問題に対して歯に衣着せぬ批判や主張を繰り広げながら、病に倒れ、早すぎる死が惜しまれる英語教育学者、若林俊輔氏(東京外国語大学名誉教授, 1931-2002)の著書である。

没後に出版されたと言っても、未発表のまま死蔵されていた著作を掘り出して集めた「遺稿集」ではない。氏が生前に英語教育界に対して放った数々の問題提起や批判、提案を含む著作を、氏に育てられ、氏をよく知る弟子たちが整理分類して解説をつけた著作集である。収録された論考はどれも、現在も未解決のままになっている英語教育の諸問題に鋭く迫っている。その意味では、氏の「あの世からの主張」とも言える。

帯の紹介文には、「若林俊輔が生きていたら、今の英語教育にどんなことを言っただろう?」とある。その答えは、本書に収められた氏の著作を、解説とともに読むことによって見えてくる。

紹介文はさらに、「単行本未収録の記事を中心に独自編集した『若林流』論争的英語科教育法!」と続いている。私は大学に6年間在学していた間、氏の「論争的」英語科教育法やゼミを、数年間受講する機会に恵まれた。ラディカルな論調で英語教育について熱く語る授業は、独特のものであった。本書を読み進めると、当時の教室で熱く語る姿が生き生きと思い出される。

氏の教科教育法の授業は、語り口が熱く過激なだけではなく、内容も独特であった。通常扱われるような、第二言語習得の理論や、指導案の書き方、細かな指導法の

解説などではなく、常識を疑い本質を見極め、流行に翻弄されないための「根」となる哲学を形成するための講義であった。現場に出てすぐ役立つような類いの講義ではない代わりに、こうして没後14年たった今でも、英語教育が直面する問題にも多くの示唆を残し、指針となる内容であった。

政治的な意思表示や行動力も、若林氏の大きな特徴であった。そのことは第1章に収められた記事の目次だけを見てもわかる。小菅氏は章末の解説の中で、若林氏の歯に衣着せぬ「若林節」により、「一方では、現職教員や学生の間で熱狂的なファンを生み出し、他方で、少なからぬ敵を作った」と振り返っている。「中学校英語週三時間に反対する会」を立ち上げ、自宅に事務局を置いて精力的に活動していた様子も紹介されている。しかし、過激なばかりではなく、20年間にわたり毎月自宅に教え子らを集めて勉強会を開いていたことや、氏が関わっていた語学教育研究所で若手英語教師たちを熱心に面倒見で育てていたことも紹介されている。

第4章では、教科書を取り巻く行政的なしごきや、広域採択や検定制度的問題点についての論考がまとめられている。このような問題意識は、氏が教科書編纂に関わる中で深められたものだろう。氏は教科書だけでなく、学習指導要領など教育行政の歴史や現状について多く発言し、関連する法規にも精通していた。同時に、英語教育に携わる者が、もっと法規や行政の動きに関心と問題意識を持つべきだと考え、英語教師たちの政治的無関心と「従順さ」を嘆くことも多かった。本書でもしばしば

言及されている「日本英語教育改善懇談会」(1972年設立, 現在も「日本外国語教育改善協議会」として継続)には初回から参加し, アピールの作成や, 「外国語教育振興法」案の作成など, 精力的に活動した。第4章から6章に集められた著作を通じて, 現在の英語教育界ではほとんど話題にならない様々な問題について, 英語教育に関係者の「関心・意欲・態度」に変化が生まれることを期待したい。

氏は歴史的な視点をとても大切にしていた。それは, 第5章だけでなく, 本書全体を通じて, 現在に通じる史実についての言及が多いことでもわかる。また, 河村氏の解説でも紹介されているように, 氏の授業では明治期の文献や, パーマーなどの著作を読みながら, 英語教育が現在抱えている問題を検討することがよく行われた。なぜそれほど歴史にこだわったか。「英語教育史から何を学ぶか」という論文に次のように書かれている。『歴史』は過去を学ぶものである。それはそれでいい。しかし, なにゆえに『過去』を学ぶか。それは, 現在を知るためである。そして, できることならば未来を予見するためである」(p.217)。

このような視点を持っていたからこそ, 週3時間体制に向けてかすかな変化が起こっていたとき, 周囲の英語教師のほとんどが危機感すら感じていなかった段階で, 鉾山のカナリヤのように危険を察知し警鐘を鳴らすことができたのだろう。

近年, 学校教育だけでなく, 企業や産業界などあちこちで, 客観的能力試験のスコアに代表されるような, 実用的な英語力の必要性あるいは重要性が叫ばれている。我々英語教師にとって, これは歓迎すべき追い風なのだろうか。若林氏の次のような主張を踏まえて考え直してみると, 昨今の近視的ともいえる実用主義には, とても大事なことが欠落していることに気付かされる。「私は, 他の教科に比べても, 絶対的に英語教育が重要であると考えているのである。英語教育は国民教育の中核の位置を占めるべきだと考えている。英語教育を抜きにした国民教育は考えられない。それは, 英語教育が『言語教育』だからである」(p.242)。単に「実用か教養か」という二分的な目的論ではなく, あくまで学校教育の中で英語教育を行う意義や, 人間として外国語を学ぶことの意味と重要性ということにこだわり続けた氏の姿勢がうかがわれる。収録された論考を踏まえて, 我々は現在の状況を冷静に見つめ直す必要があるだろう。

本書には, 英語にまつわる様々な「雑学」的な話題が出てくる。これらの中には, 英語学習に苦心する生徒

や教師たちの悩みを聞く中から生まれてきた話題も多い。いわゆる「できる生徒たち」はあまり疑問を抱くことはない。覚えればいいことは文句も疑問も差し挟まず, さっさと頭に入れていく(そしてそういう優等生が英語の教師になったりする, というのも考えものではある)。一方, 学習に苦勞している生徒からは, 優等生が思いもよらないような疑問が投げかけられる。氏は, そういう話題を受け止め, 納得できる答えを模索するのを実に楽しそうに行っていた。それらは, 本書の第7章のタイトルにもなっている『英語の素朴な疑問に答える36章』(ジャパントイムズ, 1990)という本にまとめられたが, 残念ながら現在は絶版になっている。本書でも触れている, 不定冠詞anとaの使い分けに関する「ウン」(p.231)や, なぜ三角形の面積の公式で「底辺」はbなのか(p.234)という話を, 氏から直接うかがったときの, ストンと腑に落ちた感動はよく覚えている。

氏の「持ちネタ」のひとつに, いろいろな立体を英語で何というかというものがある(pp.232-233)。氏が編集した高校教科書でこの話題を扱ったとき, そんな特殊な語を扱うのはいかなものかと, 現場教師たちには受けがよくなかったと氏から聞かされた。しかし, これらは英語を学習し始めるまでには学校で習い覚えている知識であり, いろいろな教科に出てくる英語に関わる部分は英語という教科で教えるべきという氏の提案は, 「知的好奇心に応える英語教育」という記事で触れられている。このような提案は, まさに最近話題になっているCLILに通じるものだが, 当時の教師たちの反応は「われわれは『英語』を教えているのであって, 他の教科にまで手を伸ばす余裕はない」(p.233)だったという。まさに早過ぎた提案だったといえる。

さて, 本書の題名『英語は「教わったように教えるな』』である。これは「思い込みからの脱却」と同じくらい, 氏が生前繰り返し教師たちに戒めていた言葉からとったものだ。この言葉について私なりの解釈をお許しただけなら, 二通りに解釈できる。ひとつは, 「思い込みからの脱却」とも通じるが, 常識や俗説を疑い, 本質を掘り下げて自分の教え方を改善していけ, という解釈である。もちろん, ややパラドックス的ではあるが, それは本書に書かれていることも含めて考えるべきだろう。もうひとつの解釈は, ほとんどの英語教師は, 氏からすれば理想からは程遠い, 問題に満ちた授業を受けてきたわけで, そんなやり方をそのまま真似てはいけな, ということだ。

氏の他界から14年, 英語教育は, 英語の授業は, どれ

ほど前進したろうか。これから数十年経ったとき、あの世の若林氏から、「うん、そろそろ安心して教わったように教えて大丈夫だな」と言われるような英語教育になるのだろうか。それは、氏が残した本書の論考を、現在の我々がいかに受け止め、乗り越えていくかに掛かっている。

## 【参考】目次

本書の出版にあたって——いま、なぜ、若林俊輔なのか（小菅敦子）

### 第1章 いっとう りょうだん

「英検」はやめてもらいたい

教科書を値上げしよう

小学校への英語教育導入——それはわが国の基本教育の破壊である

AET 導入反対の弁

英語教育を破壊する週3時間体制

母語をつぶすつもりか

首相の英語

杞人憂天

解説（小菅和也）

### 第2章 つまずく生徒とともに

英語教育の基礎について

英語学習の目的意識をどう持たせるか

こうすれば英語ギライになる

解説（若有保彦）

### 第3章 英語授業学の視点

黒板とチョーク

つづりと発音の関係の規則性

アルファベットが覚えられない生徒

文字にはいろいろな字体があることについて

辞書指導の視点

文法用語の日本語は学習を妨げる

文法事項の指導順序をどう考えるか

「四技能」のバランスということ

「言語活動」の基本形態

Sam have three brother.——「正しい」とは何か

テストと文法指導——「コミュニカティブ」な評価基準設定の提案

テストの季節

英語科における観点別評価をどう考えるか

解説（手島 良）

### 第4章 ことばの教科書を求めて

ことばの教科書を求めて

会話形式の教材のこと

「亡き数に入」った教科書

広域採択制とは一体何なのか

優れた英語教科書出現の条件——検定制度がなくなれば優れた教科書が現れるか

解説（手島 良）

### 第5章 英語教育の歩み

入試英語

「学習指導要領」の変遷

昭和22（1947）年の『学習指導要領』を読む

外国語教育改革論の史的変遷——日本の英語教育を中心として

英語教育史から何を学ぶか

十年、今や、十昔

解説（河村和也）

### 第6章 英語教育にロマンを

知的好奇心に応える英語教育

改善懇 第5回 アピールについて

外国語教育振興法（案）

言語教育としての外国語教育のこと

教員の養成と「研修」

21世紀の英語教育が抱える課題について

マスコミと英語教育

解説（河村和也）

付章 英語の素朴な疑問に答える

「基礎を教える」ことについて

名前の話

生徒を混乱させるものについて

「どうでもいいこと」について

解説（若有保彦）

出典情報・注

若林俊輔氏年譜

索引

